音楽珍事絵図

栗山　丈

プロローグ

これからご紹介するお話はわたしがある人物にインタビューをした記録であります。それはある大学教員による、度重なる講義中の騒動をエピソードにしたもので、その本人とお逢いすることが叶いまして、モノローグで語っていただいたのです。東京の北部に位置するある大学で音楽学者である、その猪狩耕造さんは、身に降りかかった難局をみごとに乗り越え、今もお元気で余生を楽しんでいらっしゃいます。わたしは、猪狩さんとは直接に縁があるものではありませんでしたが、この大学に長年勤務する事務総長に古くから懇意にしてもらっていて、ちょっとした話の雑談からこの話が持ち上がったのです。そして、わたしが大きく関心を示したため、事務総長は「それならば」と、次の書類を少しだけ見せてくださいました。

「××大学講義事故等調書」

日時等：二〇一六年十二月一六日　一年次三時限目「音楽史」の授業

会場：講堂一〇一

講師と学生数：音楽学専攻の猪狩耕造講師と五十一人の講堂における対面授業

記入者：猪狩耕造

概要記述欄：講義中に自らの排泄生理現象によって、集中力をなくした事態に陥り、その後、講堂内で全員が身の危険を感じる凶悪事件が発生。詳細は別紙本文を参照。

ここにある本文は見せてもらうことはできなかったのですが、今回、どうしても事の真相を確認したい欲に駆られ、事務総長に紹介をしていただき、猪狩さんにお会いすることが叶ったものです。そして、自らその当時の状況をお話ししてくださることになったわけです。わたしも他の大学で教員として和声学を教えてきましたが、古今東西、このような一件は珍しいと思ったものですから、このケースが猪狩さんのその後の人生にどう影響を及ぼしたのか、そのあたりに大きな期待を寄せていました。しかし、大学名や当時の関係者を公表することは配慮を示され、許諾が得られなかったものの、ご自身

のことについては対外的には公にしてもらって構わないとおっしゃってくださいました。またとない好機ですので、大学の名誉と一部の個人情報を除いてここに公開をすることにしたものであります。モノローグを録音・録画することなどは一切していませんし、学生名も伏せてあります。プライバシー上の制約が加わるのは致し方ないことではありますが、本人は快く取材に応じてくださり、非常に感慨深いものがありました。お目にかかると、早速、事件から数年後のこの機会を得られたことに心から感謝を申し上げました。今回の件が猪狩さんのその後の生活にも興味深かったのでと前置きを挟みまして、聖人君子の猪狩さんの世界の独白は始まったのです。

1

ああ、あの日に起こった事ですね？　これは、この日以降の我が人生を大きく左右させたことは色々な意味で間違いないでしょうね。この一件が原因で、普通に人と接触することができなくなり、更年期障害よろしく自律神経が乱れ始め、おまけにうつ病にも悩まされました。これは備忘録として自分の胸に刻んでしまっておいたものでしたから、様々な物事が度重なって生じたこの一件、記録を取り終えたこの時点においても忘れていませんし、その先も忘れることはないでしょう。本学の非常勤講師として「音楽学」及び「音楽史」の教鞭を執っていた僕は、この日は一年の教養選択科目である「音楽史」を担当していました。講義は歴史上の音楽家を学ぶだけでなく、器楽形式の発展なども織り交ぜて、楽曲をより理解してもらえるように構成していました。年間通じて十八回のカリキュラム中、この日は第十四回目の講義であったと思います。中世から現代に至る長い音楽史のなかで、前回まで古典派の話を終えて、おおむねロマン派にまたがる素材を準備していました。年間のシラバスの概要をざっと申し上げておきましょう。西洋音楽のルーツはピタゴラスの音階に始まると言われていますが、何と言っても9世紀に出現したとされるグレゴリオ聖歌ですね。無伴奏で歌われるモノフォニーの教会音楽です。そこから七世紀後の十六紀。ルネサンス期の音楽になりますと、特に後期では一四世紀以降から歌われてきたマドリガルのようなポリフォニックな声楽曲の発達が顕著で、パレストリーナやビクトリアなどの作曲家の作品が知られています。独奏器楽そのものやそれらを伴奏する形式が発達してきましたバロック時代では、J・S・バッハの平均律クラヴィーア曲集、ブランデンブルグ協奏曲のうちの弦楽合奏の第3番・複合協奏曲の形をとった第5番などを紹介してきました。さらに古典派の交響曲、協奏曲形式の確立はハイドンやモーツァルト、ベートーヴェンを経て、ロマン派へと引き継がれるわけです。一方で、室内楽のほうでは古典派の時代からピアノ・トリオや弦楽四重奏曲が多

く作曲され、器楽形式が一段と開花する時代になります。聴いてもらったものは、確かシューベルトの弦楽四重奏曲第一四番「死と乙女」のはじめを聴いてもらって、その美しい旋律の魅力などを解説してきました。この時代以降は、同じドイツのR・ワーグナー、メンデルスゾーン、シューマン、ポーランド出身のショパン、フランスのベルリオーズなどが全盛を極めました。一九世紀の半ばでは、オーケストラ編成拡大を主体とした管弦楽法が確立され、チューバ等の金管楽器や多くの打楽器を導入した色彩感覚の溢れる大管弦楽作品が登場します。ここでは確かベルリオーズの「劇的交響曲《ロメオとジュリエット》」のなかにあるスケルツォ「愛の妖精の女王マブ」の繊細な作品を取り上げたと思います。これは弦のミュートと管楽器の絶妙な響きのバランスがよいので、ライヴ映像で聴いてもらったものです。学生には反応がよかったのか、静かに映像を凝視しながら聴いていた人が多かったように思います。あとは、一九世紀の後半になりますと、フランスの作曲家を取り上げないわけにはいきませんね。ビゼー、サン＝サーンス、フォーレあたりでしょうか。そして近代の印象派ドビュッシー、ラヴェルの時代へとつづきます。今回はサン＝サーンスのヴァイオリンと管弦楽のための「序奏とロンド・カプリチョーソ」をデジタル録音で聴いてもらう予定でしたが、ここで一つのサプライズとハプニングが立て続けに偶発することになります。

そのことはもう少しあとにお話しするとして、その後の2回ではドイツのブラームス、リヒャルト・シュトラウスとロシアのチャイコフスキー、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ラフマニノフらに焦点を当て、人と音楽についてそれぞれ語る回となりました。そして最後の2回に新ウィーン学派であるシェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンをすべり出しに、現代音楽を思いの限り語ることで締めくくっています。新ウィーン学派以降は特に専門分野でしたので、非常に充実した話ができ、学生も関心を持っていただいたようで満足でしたね。偶然性・不確定性を音楽に導入したアメリカのジョン・ケージ、さらにデイヴィッド・チューダー、モートン・フェルドマンなどは、二十世紀前半から前衛音楽が歩みゆく道筋を位置づけた作曲家たちと言えるでしょう。図形楽譜作品などの新しい試みも成されましたが、その後はやはり衰退してしまいます。国内でも著名な作曲家が多く輩出されました。伊福部昭、芥川也寸志、矢代秋雄、黛敏郎、武満徹、湯浅譲二、間宮芳生、三善晃、そして今現在、多くの作曲家が今の時代の音楽を創造し続けています。各作曲家の音楽や譜面などを取り上げ、できるだけ多くの作品を聴いてもらうとともに、現代音楽の本質的な美というものを伝えられたと思っています。今日、〝現代音楽〟が一般に与える印象は決して良いものとは言えないのが現状ですが、人間の想像力をかき立て、物事の本質を見極める力を養える。行動の上でも、ポンと背中を

後押してくれそうな、そんな気がしていましてね。音楽は癒しのフィーリングが得られたりしますけども、現代音楽も聴くと、心の動きの刺激となって、人間の思考活力の一助となるじゃないかと思うんですよ。今までそんなことを学生には伝えようと思って、このようなカリキュラムを組んだわけです。

2

当日は年の瀬も押し迫る大変寒い日でした。定刻の十三時、講義会場に入室してから、暖房装置の設定温度を若干高めに調整し直して、演台の脇に立ちました。「今日もよろしくお願いします」と一言あいさつをした後に、年度末の最終試験の評価のしかたについて、説明を始めました。私の評価の方法については、出席を三割、最終試験（記述試験）を七割の割合で評価することにしています。それを聞いた学生諸君からは、「何だぁ。出席の割合低いじゃん」と落胆する様子も窺えました。「まあ、そう言わずに」と出席票を配り終えると、それだけもらって日にち、科目名、氏名をサッと書いて隣の学生に預けるや否や、とっとと後ろの出入口から退散する学生も見受けられます。講義の最後に配ればいいのはわかっているんです。本当にやる気のある学生に聴いてもらいたいので、その気のない学生は帰ってもらって構わないのです。そういう学生は顔をよく覚えておくようにして、名前と照合の上、最後の評価で減点をしていますが、そのことは内緒にしています。学生の皆さんは音楽に関心があって、何かしらの音楽ジャンルが好きな人や、楽器を習っている人もいました。音楽は聴くのは好きだけど、勉強まではしたいとは思わず、単位が取得しやすかったから選択したという人もいて、随分二極化していたように思います。

シラバスの順序でいきますと、前回はシューベルトの弦楽四重奏曲まで聴いてもらいましたので、この日はベルリオーズの話から始める予定でした。ベルリオーズは医者である厳格な父親のもとで育てられ、初めは医療の道を進むように指導を受けます。しかし、音楽への関心は薄れることはなく、楽器や和声の勉強を自分で修めていきます。恋愛を多く経験しますが、失恋も多く味わったことで、音楽へ注ぐ情熱は更に高まりを見せていきます。当時の常識では考えられない試みが多くなされ、大管弦楽のための作品を多く残しました。ベルリオーズは交響曲も作曲していますが、それまでの作曲家とは異なり、番号を付さなかったことは面白いですね。すべて標題をつけたわけです。有名なのが「幻想交響曲　作品一四」ですけれども、彼の最初の妻となったハリエット・スミスソンとの婚姻前の絶望的感情を音楽として表現した作品です。その他には大編成の「葬送と勝利の大交響曲　作品一五」、ヴィオラの独奏を伴うスタイルの「交響曲《イ

タリアのハロルド》作品一六」、大規模な合唱とオーケストラのための「劇的交響曲《ロメオとジュリエット》作品一七」。以上の四曲が交響曲に位置づけられています。その中で、講義では劇的交響曲『ロメオとジュリエット』の第四部「愛の妖精の女王マブ」のスケルツォを聴いてもらったことは先ほどもお話ししました。オーケストラの管楽器と弦楽器の繊細なテクスチャを感じ取ってもらいたかったことが、ここでの意図であります。大きな楽器編成でも、弱音器を付けた弦楽器と木管楽器のピアニッシモで浮かび上がる音楽は泉から湧き出る澄んだ清水のような美しさがありますね。学生たちはこの音楽が終わると、「わっ」とささやかな歓声が上がりましたから、こういう時こそ、音楽の魅力が伝えられてよかったと思う時ですよ。

この頃だったでしょうか。感動が巻き起こる同時に、タイミングの悪いことに僕は尿意を若干覚え始めたのです。朝から下痢症状気味の腹痛が伴っていました。講義前にトイレを済ませていなかったのは迂闊でしたね。まだ、話を始めて二十分ほどしか経っていません。はじめのうちは安易な胸算用で、そのまま講義を進行させていました。むしろ話のほうは弾み出し、作曲家の逸話にジョークも交えていきましたので、学生たちの関心度も一段と高まりを見せていたんです。次は何が聴けるのか、どんな話が飛び出すのか、特に前方の列に座る学生は興味津々という様子でした。（えい、このまま行ってしまえ）と我慢しながら思いつつも、徐々に話の活舌が悪くなり、気持ちに焦りが見えてくるようになりました。話も少しずつトーンダウン気味です。そんな時に急き立てるように、一列目に座る学生Aが質問を始めます。「ベルリオーズの功績には他にどのようなものがあるんですか?」とね。どうにも抑えきれなくなった尿意に冷静さを前面に出そうとします。しかし、もう学生の言うことに対して、まともに答えることもできませでした。早くトイレに行きたいことだけが頭に残り、完全に思考力の低下を感じていました。しかし、学生の言うことは、「管弦楽法の確立と文学作品に触発された色彩豊かな作品であること」と早口でパッと答えて、その場はしのいだのです。

やれやれと思っていると、次はどうでしょう。今度は携帯電話にキンコンとLINEが一本入る音がしたではありませんか。（こんな時に――）と、少し不快になりつつも、次のサン＝サーンスの話の準備のために、書類を探そうとしました。そして、「序奏とロンド・カプリチオーソ」を聴いてもらおうとパソコンの説明映像を準備し、CDをプレイヤーにセットしたときのこと。顔色も青ざめていたのでしょうか、この講義を毎回真剣に聴いてくれているBさんが心配して、「先生、顔色悪くない?」と声をかけてくれたのです。優しい心遣いがたまらなく嬉しかったので、「ありがとう。大丈夫」と謝意を表し、サン＝サーンスについて、説明するための手持ち資料を鞄から取り出して

確認をし始めました。あとからわかったことですが、BさんとCさんは相談し合って、「あれだけ、顔色が青ざめているのに、そんなはずはない」と判断し、事務室に電話で連絡を入れてくれていたそうです。ですので、学校側では〝音楽史〟の講師に何か異変があったのはわかっていたわけです。携帯に事務室からの着信が先ほどのLINEとは別に、あったことにこの時気が付きました。脂汗がまだ引いていない状態でしたが、若干気持ちも落ち着いていましたので、通常どおり話を進めていきました。

そしてまた、話を先に進めているうちに、僕の顔の表情がさらに険しくなってきたのか、怪訝な顔をする学生もいまして、あちらこちらで木々の葉が強風にあおられるかのようにザワザワと落ち着きません。――そう、サン＝サーンスの話に戻さなければなりません。生前は、作風によるものだと思うのですが、フランスでは彼の作品は親しまれることはなかったと言われています。しかし、最晩年にようやく評価されるようになり、亡くなるときには国葬されたという彼自身の境涯などの話も重ねていきました。そして、諏訪内晶子、シャルル・デュトワ指揮フィルハーモニア管弦楽団の演奏で、CDプレイヤーの再生ボタンを押そうとすると、自席からぬっと立ちはだかる学生が視界に飛び込んできたのです。

3

その学生は音楽に才能のある女性のDさんでした。毎回出席し、真面目に勉強するタイプの方です。そして、何を言い出すのかと思ったら、自分がこれから「序奏とロンド・カプリチオーソ」を録音の代わりに演奏をすると言うのです。CD再生の直前の出来事に周囲の学生はキョトンとしています。おまけに、誰かこれのピアノパートを弾ける者はいないかと周囲に尋ねるではありませんか。すると、しばらくして恥ずかし気に手を挙げたのが、中間あたりに座っていた男性のEさんでした。口数の少なくて、消極的な性格の青年かと思いきや、この曲を伴奏しようというのですから驚きです。Dさんは初見でも大丈夫かとEさんに尋ねると、彼はそっと首を縦に振りました。（これは、面白いことになった――）と、その時は僕も感情の高ぶりを覚えました。実は彼女は学校帰りにヴァイオリンのレッスンに行くために、今この場で楽器を持っていたのです。講堂内にはアップライトですが、ピアノがありましたから、生で演奏できる環境にありました。DさんはEさんにピアノパート譜をサッと渡すと、彼はパラパラと譜面をめくり、ニヤッと唇に笑みを浮かべました。そして自信に満ちた顔で彼女に親指を立てて付き出すと、交渉はもう成立です。僕は二人にこの場を託し、しばらく高みの見物と決め込むことにしました。譜読みとチューニング、そして音出しの時間を少しとってから、二人

の演奏は始まりました。Eさんが初めに奏でるアルペジオの伴奏にDさんの感傷的な旋律が乗り出します。二人の呼吸は二枚の紙がピッタリと重ね合わさったかのようにズレることはありませんでした。音質もプロ顔負けの柔らかさを持ち、表情豊かな演奏です。

この場はしばらく二人に任せて、ようやくここでトイレに行けるタイミングだと思い、席をそっと外すことにしました。トイレに着くと、やっと用を足せると安堵しながら、トイレの入口の扉を開けました。そして個室の便座に座ってフーッと息を漏らしながら排尿していくと、やっと心の落ち着きを感じるようになりました。先程、講義中に入ったLINEも気がかりでしたので、この場で確認をしようとして携帯電話を開いてみると……。これはいけません、妻からの連絡で十六歳の娘が交通事故に遭い、病院に搬送されたというのです。胸のざわつきの高まりとともに、さすがにこれには気が動転し、目の前が真っ暗になってしまいました。ここまで来て、講義を途中で中断し、休講にすることはなかなか厳しい状況でした。今演奏してもらっている二人にずっと任せておくわけにもいきません。とりあえず警察署からの連絡を受けて妻は病院に向かっているとのことでしたから、LINEにはこちらの仕事が落ち着き次第向かうので、病院名を後から教えてもらうように返信しておきました。身内が不運に見舞われるのは誰でもそうですが、気が気ではありません。この後の話をすることなど、頭から飛んでしまいそうで、娘のことが頭から離れませんでした。でも、悩んでいても仕方がありません。講堂の演奏は十分弱で終了してしまいます。ここはひとまず急いで戻ることにしました。

すっかり気持ちが沈んだ状態で講堂に戻ると、演奏の方は佳境を迎えていて、すでに最後のコーダにさしかかっていました。ヴァイオリンの軽快な十六分音符は躍動感に溢れています。そして最後の盛り上がりは、今の気分とは裏腹に最大の効果を上げていました。曲が終わると、講堂内には拍手の渦が巻きおこり、僕の今の内心とは裏腹にいつまでも鳴り響いていたのが印象的でした。二人には感謝の意を伝え、あらためて心から称賛の拍手を贈りました。二人は大いに自信をつけたのか、音楽を学ぶことに誇りをもってこれからも取り組んでいきたいという所感でしたね。二人が楽器の片づけを終え、自席に戻った数分後、講堂内はこれからいよいよ大きな異変に巻き込まれることになるのです。

4

次のブラームスの仕事について話そうと思いましたが、会場全体の興奮が冷めやらず、お祭り騒ぎのようなざわつきはなかなか収まることはありませんでした。その時です。突然、後ろの出入口から、無造作にも勢いよく扉を開けて、ゆっくりと教壇に近づいて

くる男の姿が視界に飛び込んできました。薄汚れたグレーの上着に、髭ヅラで髪のボサボサっとした男。右手には地がほころびかけている茶色い布の手提げ袋を携え、それを背中に背負うようにしていました。不愛想な表情のなかに、時折ニヤリとした笑みを浮かべ、演台のほうに徐々に近づいて来ています。講堂内は（誰だ、いったい？……）と怪人物に不安を抱く学生。そして、その男は次にこう叫んだのです。

「こらっ、お前ら静かにするんだぁ。全員動くんじゃねぇ！　下手なマネする奴らはぶっ殺す！」

そう力強く言い放ち、突っ込んでいたポケットから手を出すと、手提げ袋から短刀を取り出すではありませんか。そしてその短刀を振りかざし、その手提げ袋をズタズタに割いてしまったのです。これは大変なことになりました。どうやらここにいる我々を人質にして、立てこもるつもりのようです。講堂内は「キャーッ」と悲鳴が上がり、騒然とした空気に包まれました。よりによって、どうしてこんなことなったのか？　意を決してその男に「何が目的だ？」と穏やかに尋ねたのです。すると男は目をギラギラとさせてこう答えます。

「ヘッヘッヘ。おりゃあよう、社会からずっとクズ者扱いされてきてるからよう、一発やらかしてやるからな。誰も相手にしてくれねえから、学生のふりして正門から入ったらよう、いとも簡単にスルスルとここまで来れたってわけだ。ずっと社会から孤立してきて何もできねえクズなもんだからよう、せめて社会をアッと言わして散ってみせるぜ。お前ら、これから皆殺しにしてやるから覚えておけよ。オラーッ！」

背筋が寒くなるようなこの放言に、誰もが震えあがりました。血の気が引いて、失神寸前で倒れ込んでしまう者、講堂内が恐怖の渦に巻き込まれて泣き叫ぶ者もいました。これが社会に馴染めなかった男の最後に考えることかと思うと、個人的には哀れに思いましたが、男の様子を窺っているうちに、段々と昔、高校で教師をしていた頃の薄っすらとしたある記憶がよみがえってきたのです。「まさか――」と思い、ハッとしました。

「く・ろ・き……、黒木和馬だろ？　キミは――」

「……」

名前を聞かれて過去の記憶を思い出したのか、サッと男の顔色が変わりました。

〝黒木和馬〟――実は、彼は私立の迫田高校で僕が音楽の教員をしていた頃の教え子だったのです。現実だとすれば、何と心の痛む話でしょう。悲痛な想いをグッと腹底に押し込め、ここは何としても、最悪の事態に発展することだけは避けなければなりません。この男を過ちから救う意味でも説得しなければならない――、そう思ってそっと語りかけました。

「いったいどうしたというんだ？　こんなことをしても一生後悔するだけじゃないか。今、キミがするべきことはそんなことじゃなくて、社会にきちんと順応して、誠実に生きていくことじゃないのか？　一生を棒に振る前に、今からでも遅くはない、気持ちを入れ替えてみてはどうだ？」

これに黒木は一層、反駁の勢いを示します。

「バカなことを言うな。俺は真面目に一生懸命生きてきたんだ。学歴がない分、印刷会社の営業職として身を粉にして働いてきたんだ。けど世間はそう甘いもんじゃなかった。俺はケダモノのように扱われ、疎外され続けてきたんだ。たまったもんじゃねぇ」

早く自分の過ちに気付いてくれないものかと願って、黒木を改心させようと、しばらく穏やかに対話を続けました。しかし、依然、興奮状態にある黒木は、ここまで自首に応じることはありませんでした。――ところがです。話の流れから高校時代のある回想を語ったところ、急に彼の顔色が急変し始めたのです。当時、黒木の母親が中度の脳梗塞を患っていて、その看病に当たっていたのを思い出し、その時の切ない想いを込めて黒木のつらかった想いを代弁しました。そう、黒木には夢がありました。並外れた卓球の才能の持ち主で、オリンピックへの進出を目指していたのです。しかし、折しも母親が〝くも膜下出血〟を併発し、付き切りの看病でその夢も絶たれてしまいました。その時は担任として事情を聞かされていて、黒木は無念の想いをどこにもぶつけられず、懊悩のどん底に沈んでいたのです。とにかく、今は黒木の心を落ち着かせようと優しく、当時の僕の想いを語りながら、最後の一言を浴びせました。「これでは天国の母親は嘆かずにはいられない」と。黒木は初めは何を今更という感じでしたが、それを聞いた途端に感傷的な感情を見せ始めました。自分の目指す道を閉ざされた想いは忘れられずに、ずっと心の奥底に秘めていたのだと思います。目頭が熱くなっているのが傍から見ても分かりました。しばらく目を閉じていましたが、そのうち回想に浸っていたのか、

「切ねえ……」

黒木はそう一言呟き、しばらく呆然としていました。

気持ちが緩んでいるのは今です。この場をなんとかしなければならないと思った矢先の事。対面にいた黒木は急に足元の教壇の段差に気づかず、足を踏み外してバタリと僕のほうによろけて倒れ込んだのです。これはチャンスだと思い、とっさに黒木を抱きかかえて受け止め、「エイ、ヤア」とばかりに背負いこんで投げを打ちました。その勢いで黒木の持っていた短刀は前方にポロリと転げ落ち、それを拾われないようにすかさず遠くに蹴っぽると、近くにいた学生がそれを拾って確保してくれました。

倒れ込んで半分、気を失いかけている黒木の目尻からは涙がこぼれていました。すぐ

に外に連れ出さなくてはと思ったその時です。校内で救急車のサイレンの音が近くで聞こえ、段々とこちらに近づいてきているようでした。そして、救急車の止まる音とともに、数秒も経たないうちに、なんとこの講堂に救急隊員二人が担架を担いで入って来たのです。その時は、（何でここに？）と思いましたね。救急隊員は患者はどこかと近くの学生に聞きます。すると、例のDさんが透かさず倒れ込んで気を失いかけている黒木を指さすと、救急隊員は手際よく彼を担架に乗せ、車内にいる隊員に病人確保の連絡を無線で取り合うと、足早に外へ出ていきました。こんなにうまい展開があっていいもんなんでしょうか？　あとから聞いた話ですが、救急車が来たのは、学生が私の顔色の悪いのを見かねて事務室へ連絡してくれた時に、事務室の職員は講堂には来ませんでしたが、講義の中断もやむなしとして、東京都消防庁に救急車の要請をしてくれていたらしいのです。

会場内は精神的緊張感が解かれ、安堵の空気がフワッと広がったような気がしました。その後、黒木和也は建造物侵入罪及び銃刀法違反の罪で消防局から警察に引き渡され、逮捕されたとの情報が伝わり、無事にこの事件は鎮静化に向かいました。終業時間までは少し時間がありましたが、この事件のあとに警察の事情聴取に応じるように事務室から連絡を受けましたので、この日は恐怖に怯えた学生の心の傷を少しでも癒してもらうために講義はこれで打ち切りにしたのです。

事の顛末を警察にお話しするときに、教え子がこのような騒動を起こしたことに対し深謝の念を示し、お騒がせの事態を招いた当時の状況を細かく説明をして、間もなく解放されました。

そう、それからその日のその他の仕事はすべて済ませ、夕方には妻から知らされている娘の運ばれた市民病院に向かいました。幸いにも左足を脱臼した程度で大事に至ることはなく、大したことはなくて済みました。一定の処置を施してもらい、ひとまず自宅へ戻る許可が降りたのです。こうして、劇的な一日が終わろうとしているところへ、妻には「大変な一日でしたわね」と労いの言葉をかけてもらいました。社会で目的を共にしていない人間同士が共生することは、いつ何が起きるかわからず、危険との隣り合わせの状態にあります。また思いもかけない幸運にも遭遇することもあるわけです。〝縁は異なもの味なもの〟と申しますが、教員生活を通じて悲愴に満ちた出来事に何度も出くわしましたし、音楽を通じた素晴らしい出会いもありましたから、人生っていうのは本当に趣き深いものです。これからもその時々を大事に生きていくことにしたいと思っています。

エピローグ

このインタビューの後、お別れの挨拶時に、猪狩さんはにこやかにわたしの眼を見て、「お元気で。どうぞあなたもお幸せにお過ごしください」と心温かく優しく握手をしてくださいました。その時の温かみのある謙虚な姿には万感胸に迫るものがあり、いつまでも忘れることはありません。一件では、身体的かつ精神的苦痛を伴いながらも、毅然たる態度で、自分の任務を全うしたその精神性と堂々たる振舞いは大学からその栄誉を称えられ、道徳的にも尊敬と称賛に価するとして、しかるべき〝特別栄誉教授〟の称号が与えられました。そして××大学において、学者生活を終えるまで職務に精励し、音楽学であるところの音楽史に精通されるとともに、器楽形式についての自由性の研究に専心されました。猪狩さんのジョン・ケージの研究には大変定評があります。ケージは作曲の段階で楽譜に落とし込むプロセスに偶然性が含まれる〝チャンス・オペレーション〟と楽譜を通じて演奏され聴取者の耳に届くプロセスに生ずる不確定性の概念を明確化し、既成の概念を打ち壊したことなどで知られています。こうした「実験音楽」の大家の伝記『肖像・ジョン・ケージ』を著し、広く音楽界でもベストセラーになりました。また、引退後も音楽に対する熱意は覚めることがなく、執筆・講演の活動は今もなお続けられているそうです。社会に対して肯定的に生きてきた方に、人生そのものを心豊かに生きていくことを教えられることにもなった貴重な邂逅だったのです。

栗山　丈

くりやま　じょう

本名の横田直行で現代音楽の作曲家として長年、音楽作品を発表し続けてきたが、近年からユーモアを交えたポジティブ思考になれる短編小説を書き始める。その後、作曲と並行して音楽をテーマにした短編小説を書いている。三田文學会、日本作曲家協議会会員。

ブログ：note.com/kuriyamajo